

天馬の章

劇作家

岡部耕大

(109)

夢になるのだろうか。映画や舞台の粗筋も夢に現れる。「そうか。あそこはこう書けばいいのか」「あの続きはどうなるのか」。

夢は朝方を見るものかもしれない。午前2時か3時にいつたんは起きる。それからうつらうつらとする。その時間帯に夢を見る。訪れたこともない土地の夢や知らない人物が登場する夢である。若い日の父や母もほほ笑んでいたりする。普段は思い出すこともない幼なじみや友人や知人も現れる。とくに亡くなつた叔母や叔父、遠い親戚も現れる。

どうかで願望していることが

夢になるのだろうか。映画や舞臺の粗筋も夢に現れる。「そうか。あそこはこう書けばいいのか」「あの続きはどうなるのか」。

夢が教えてくれる。うつらうつらしながら、そんなことばかり考えているからである。因果といえは因果である。起きると夢

しかし、黒澤明監督が工口チックな夢を描けば描いたで、すごい批判をされるのではない。黒澤明の黒澤明たるゆえん

た。わたしも、ここには書けないような工口チックな夢もいつぱい見る。老いさらばえてである。

老いさらばえて、この言葉の意味が少しわかつたような気がするのではないか。回顧か。黒澤明の「羅生門」が優れているの

た。わたしも、ここには書けないような工口チックな夢もいつぱい見る。老いさらばえてといつても、まだ70代に入ったばかりである。

しかし、黒澤明監督が工口チックな夢を描けば描いたで、すこい批判をされるのではない。黒澤明の黒澤明たるゆえん

夢と現実に揺れて

の多半は忘れている。

黒澤明監督に「夢」という映画があった。「この人は、この程度の夢しか見ないのか」と幻滅した。外国人記者クラブでの

会見では「もつとエロチックな夢はないのか」と外国の女性記者が容赦のない質問をしていく。

である。やはり、黒澤明は「夢」を題材にすべきではなかつたのかもしない。夢ではなくて現実でドラマを描いてほしかつた。

わたしは映画で夢や回想を取り入れることは反則だと考える。回想は自分を中心にして過る」とあつたのを覚えている。

いま、映画「知覧にて」の製作に取り組んでいる原作・脚本・監督である。実現できるかどうか。「現代から陸軍特攻隊基地があつた知覧を振り返ることで、戦後70年が過ぎた今日、映画「永遠の〇」に拮抗し、あるいは凌駕することを目的に企画されたものである」。これが企画意図である。企画意図はどうしても才媛になる。ただ、家の親戚の一人になる。たゞ、家の親戚の叔母さんに特攻隊を見送った「知覧なでし」隊の女学生の一人がいた。この方も昨年8月に

85歳で亡くなつた。